和歌山大学教育学部附属小学校

らいぶ 創 つくりえいたー
LIVE 創 REATOR

NO.37
2007.10.1
研究広報誌

学びの質の高まりをめざして
~確かなみとりと支援により~

CONTENTS

●教育研究会のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1・2・3
●学習紹介：「マグロから日本の水産業を考えよう！」・・・・・・・・・・・・・・4
●学習紹介：「小学校英語教育の必修化決定！～高学年の英語を成功させるために～」・・5
●学習紹介：「『発想』『論理』『表現』の育つ学び～『一つの花』の実践を通して～」・6
●学習紹介：「複式理科の学年別指導～『学年別指導の理由』と『実践報告』～」・・・・7
●コラム　：「複式学級の紹介」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

学びの質の高まりをめざして

～「つなぐ」「もどす」みとりの支援により～





ごあいさつ

全国各地から研究発表会にご参集いただきました皆様方に心より感謝申し上げます。昨年の研究会では佐藤学氏から本校の授業・学校改革に関して以下のご助言をいただきました。

１・「２１世紀型の学び」への授業（研究）の改革
２・　教師の居方（ポジショニング）と関わり方（聴く、つなぐ、もどす）
３・　グループ活動の組織と位置づけ
４・　授業の事例研究を「授業」から「学び」へ転換すること
５・　学校経営の改革（学びの専門家としての教師＝学びの組織としての学校）

この一年間はこれらの提言を参考にしつつ、子どもの『学びの質の高まり』をめざし教職員一同力をあわせ実践研究をすすめてきました。本日の授業、研究協議会、ならびに午後の報告から成果の一端を観取していただければ幸いです。

なお記念講演は昨年につづき佐藤学氏から『子どもの協同的な学びと授業・学校改革―教師の同僚性と授業改革―』をテーマに、日本の学校・教師・教育のあり方について国際的な視点からお話していただきます。ぜひ有意義な一日をお過ごし下さい。

学校長　松浦　善満

期　日　平成１９年１１月１０日（土）

日　程

8:15	8:40	8:55	9:00	9:45	10:00	10:45	11:00	12:30	13:45	14:30	16:00
受付	朝の会	移動	研究授業Ⅰ	移動	研究授業Ⅱ	移動	協議	昼食	概要発表	講演	

主催・会場　和歌山大学教育学部附属小学校・和歌山大学生涯学習教育研究センター
後　　援　和歌山県教育委員会　和歌山市教育委員会　　和歌山大学
和歌山県市町村教育委員会連絡協議会　　和歌山県連合小学校校長会



講演
東京大学大学院教授
佐藤　学先生

マグロから日本の水産業を考えよう！

社会科
5年C組 担任
片桐　宏



本校の５年生は毎年５月に,一泊二日の南紀旅行を実施している。今年は那智勝浦漁港での「近海マグロ漁業」見学に加え,新たに串本町大島で「養殖クロマグロ餌付け体験」を実施することができた。また,世界で初めて「マグロの完全養殖化」に成功した近畿大学水産研究所の「養殖クロマグロ」の養殖生けすも同時に見学できた。

これらの特色あるマグロ漁業を見学・体験し,比較することで,現在のマグロを取り巻く世界的な問題点を考えさせるような学習単元を構成した。マグロ漁業を多角的・多面的に調べ,幅広く考えることで日本の水産業の特色をより明確にすることができると考えた。



那智勝浦町「近海マグロ漁」

見学や体験でわかったこと

・はえなわの長さは 70~150km
・なわを引くのに 10 時間
・船はハワイの沖まで行く
・睡眠時間は５～６時間
・今日の船は宮崎県の船
・最近は漁獲量が減ってる
・船の重さは 19ｔ



串本町大島「養殖マグロ餌付け体験」



・直径 30mの生けすに 300 匹のマグロ
・えさはアジ,サバ,イワシ,イカ
・捕獲した稚魚を養殖している
・養殖マグロは全身が“トロ”になる
・えさやりは,一日２回
・出荷するまで２年半がちょうどいい
・養殖マグロは大きく育てすぎると損



◎南紀旅行から帰った後,見学や体験活動でわかった事柄や疑問点を出し合った。そこで,現在の深刻な世界のマグロ問題（マグロ消費量の増大,マグロの乱獲,マグロ漁獲量規制,蓄養マグロの問題点等）と関連づけ,将来のマグロ漁業について考えるとともに,クラスの課題を決めた。

課題：これからもマグロを食べられるようにするには,どうしたらいいのだろう？

資料などの根拠を示しながら話し合った児童の考え

○「天然マグロ」をもっと増やす考え
・とる量を規制して,その間に数を増やす。　・日本近海の魚を保護する。
○「養殖マグロ」をもっと増やす考え
・生けすをもっと大きくする。　・養殖マグロが大きくなったら一部を放流する。
・マグロの完全養殖の技術を大いにいかす。　・卵からの養殖化を広める。
○その他の考え
・海をきれいにする。　・漁業の国際ルールをつくる。　・他の魚も同時に増やす。
・マグロをあまり食べ過ぎないようにする。（日本人は食べすぎ…）



◎「天然マグロ」や「養殖マグロ」に対する自分の思いをもちながら意見を交流する中で,将来のマグロ漁業についての考えを深めることができた。話し合いを通して,「近海マグロ漁」と「養殖マグロ漁」のそれぞれの特色について幅広く考え,水産業に対する思いがより高まった。また,マグロを安定供給するために,漁業技術の改善や水産資源の保護・育成に従事している人々の工夫や努力についてもとらえることができた。

小学校英語活動の必修化決定！

～高学年の英語活動を成功させるために～

英語活動
6年B組担任
辻　伸幸



今年の８月３０日（木）に、中央教育審議会は高学年（５、６年）で英語活動の授業を週１回設けることに合意と発表がありました。以前に出された必修化の提言は、外国語専門部会からのものでしたが、今回は小学校部会で承認され、その上位部会である教育課程部会も合意しました。すなわち、文部科学省はこの枠組みで、今後出される中教審の答申に基づいて学習指導要領を改定する方向になります。いよいよ、全国的に本腰を入れて、英語活動が小学校の教育課程に導入されるのです。

英語活動が必修化されると、今まで実践されてきた英語活動は、内容が大きく変わるのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。英語活動は英語のスキル面（聞く、話す、書く、読む）を伸ばすための必修分野ではありません。あくまでも、体験的な英語活動を行う中で、英語でコミュニケーションがとれることに感動し、こんなことを伝えてみたい、外国の文化をもっと知ってみたいといったような興味や関心、意欲を伸ばすことが目的なのです。

高学年は、英語を使ったゲームを中心に展開しても限界があります。そこで、目的をもって英語を使用する場面を設定することをお薦めします。その具体的な例が、国際交流活動です。今、学級では、下のような国際交流活動を組み入れて、その活動に使う英語を英語活動で触れたり、練習したりしています。児童たちは、外国語が通じる楽しさや他の文化に触れる面白さに気づきつつあります。

京都で外国人観光客にインタビュー

京都に行って、外国人観光客にインタービューしました。和歌山県や市のパンフレットもプレゼントしました。事前にロールプレーイングをして練習を重ね本番を迎えました。自分たちが練習してきた英語が通じる喜びを味わうことができました。



アメリカの大学生と交流

和歌山大学に短期研修に来ていたアメリカのブリッジウォーター州立大学生を学級に招いて、国際交流活動をしました。

名前、好きな食べ物やスポーツなどを英語で尋ね、日本のことについてもクイズを出しました。



ウェールズの小学校との交流

Japan21(www.japan21.org.uk)という交流団体に、紹介してもらい、ウェールズのトナレフェル小学校の交流校となりました。担任が６月に小学校を訪れ、児童たちが作成した、学校紹介のビデオレターを見せました。



オーストラリアの小学校との交流

オーストラリアは、小学校で日本語を教科として学んでいる学校がたくさんあり、メールを出して交流相手を見つけました。交流のペアをつくり絵手紙やビデオレターなどを交換して交流を深めています。



「発想」「論理」「表現」の育つ学び
～「一つの花」の実践を通して～

国 語 科
4年C組担任
志場　俊之



本年度、国語科では、「『発想力』『論理力』『表現力』を育てる」というテーマのもと、実践に取り組んでいます。一学期「一つの花」の実践を通して、「発想」「論理」「表現」が育つ場面を示し、どのようにみとり、どのような子どもを育てようとしているのか、以下に述べます。

発想

授業の中で、A児が、「プラットホームのはしっぽの」「ゴミ捨て場のようなところに」「わすれられたように」咲いている状況を次のように捉えることができた発想力は評価できます。

ゴミ捨て場＝戦争、コスモスの花＝ゆみ子

A児：「戦争は、命のゴミ捨て場のようなもので、そこに咲いている花をゆみ子にたとえれば、大変な戦争の中でがんばって生きているゆみ子が、ゴミ捨て場のようなところに咲いていたコスモスの花のように見えたから、お父さんはコスモスの花をゆみ子に渡したんだと思う。」

また、A児の発言のあと、そのコスモスの花のイメージをゆみ子に重ね合わせながらの発言が続きました。「生きている」「きれいさ」「強さ」といったその状況の中での咲いているコスモスの様子の捉え方は、場面の情景をしっかりと読み込んだ上での発想力といえます。

この発想力の背景には、一場面での戦争を捉えようとしたときに、言葉とともに、色で捉えようとしたことが関係しているのではないかと考えます。そこでは「赤」「灰」「黒」といった色が出され、町が焼かれていく様子を言葉で言い表していた時に比べ、より活発に意見交流がなされている姿が見られました。

それが、ゴミ捨て場の「黒」とコスモスの「赤」の対比から「ゴミ捨て場＝戦争、コスモスの花＝ゆみ子」という発想を生んだのではないでしょうか。その発言が、黒の中にある鮮やかな赤が「生きている」「きれいさ」「強さ」というコスモスのイメージを生んでいるのです。

論理

父親が、汽車の中から、ゆみ子の握っているコスモスの花を見つめながら去っていった様子についてのH児の書き込みです。

H児：「本当なら、最後の別れかもしれないのだからゆみ子やお母さんの顔を見ながら去っていくはずなのに、コスモスの花を見つめながらいくということは、コスモスの花に込めた思いが必ずあるはずである。」

この考えは、父親の置かれた立場を確かに捉えるところから始まっています。困難な生活状況、父親の出征、残された家族への不安、最後の別れなどの把握と、自分の生活経験とを考え合わせたからこそ「ゆみ子やお母さんの顔を見ながら去っていくはず。」という断定を下せたのです。そして、最後には一番思いを抱いている先を見つめるはずだからこそ、「ゆみ子のにぎっている、一つの花を見つめながら―。」という言葉から、父親がコスモスに思いを込めているというしっかりとした論理が展開されたのです。「もし、～ならば、～しているはずである。」「～しているということは、～ということである。」という発言は、何人かの子どもができていました。

ゆみ子に渡したコスモスには父親の思いが込められているはずだ。

状況を踏まえながら、結果から原因を導き出そうとしている論理的思考といえます。

表現

また、聞く側の聞き方についても、批判的なまたは共感的な思考ができるように、「思い地図」(自分の考えを紙の中央に書き、仲間の発言を自分の考えとの距離を考えながら、紙に書き込むワークシート)を利用し、自分の考えと絶えず比べながら聞くようにさせました。これにより、どこまでが同じでどこからが違う読みをしているのかという意識付けをしっかりもたせ、共通点や相違点を意識し、焦点を絞った話し合いへと導くことができるのです。

表現の仕方についても、相手意識や目的意識をもちながら仲間に問いかけてみたり、呼びかけながら話したりして、伝える側の仲間に伝えようという思いと、聞く側の聞きだそうという思いがつながるのです。双方向からの歩み寄りにより、表現力が磨かれていくのです。

今回は、紙面の都合上、「発想」「論理」「表現」といった主体的能力を育てる観点に立ち、それらが見えた場面を示したに過ぎません。そういった主体的な能力を育てるために、教師側がみとりの視点をもち、「ここで、〇〇さんの～のような考えができたことは～という点ですばらしい。」というようにタイムリーに評価していくことで、みんなに浸透させていきます。

わたしたちは、このような「発想」「論理」「表現」の育つ学びを実現しようとしているのです。

複式理科の学年別指導

～「学年別指導の理由」と「実践報告」～



5･6F担任
辻本　和孝

1.はじめに

本校複式学級では，昨年度より理科・社会の学習においても，国語や算数のように直接指導と間接指導で進める**学年別指導**を行っています。主にカリキュラム作成とそのカリキュラムに沿った授業実践を行い，どのような成果と課題があるのかを探っています。可能な限り５・６年生で関連する単元同士を同じ時期に配列し，異学年の交流にも期待しながら進めていています。

2.どうして学年別指導なのでしょうか？

和歌山県下の複式学級を持つ小学校では，理科・社会についても学年別指導を行うということになって，どのように指導をすればよいのか，悩みながらも研究を進めているようです。では，**どうして学年別指導なのでしょうか?** 主に，従来のＡＢ年度方式では「転出入に対しての対応が難しい。」ということから，学年別指導に移行しているようです。また，本年度の複式研究会（６／２２）において指導助言をしてくださった，橋本市立応其小学校校長の松田良夫先生のお話からも，どうして学年別指導なのかということがわかってきました。それは，指導要領にも記されていることでした。現行の**小学校指導要領〔総則〕第１章第２の４で**，教育課程の編成について

> 学校において２以上の学年の児童で編成する学級について特に必要がある場合には，各教科及び道徳の目標達成に支障のない範囲内で，各教科及び道徳の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。

と記しています。そして，その内容の取り扱いに関する共通的事項では次のように付け加えています。

> 学年別の順序によらないことができるのは，複式学級において**「特に必要がある場合」**で「各教科及び道徳の目標の達成に支障のない範囲内」に限られていることに留意する必要がある。

この「特に必要がある場合」という言葉からは，通常（必要がない場合）は学年別の順序によるということが読みとれます。つまり，複式学級でも学年別指導を行いましょうということなのです。といっても，理科の場合は安全面や準備のことを考えると「特に必要がある」といってもいいようにも思いますが。

そのようなことも考えつつ，本校では学年別指導に挑戦しています。

3.1学期の実践より

今回は，２学年の積極的なかかわりと，もう一つ，同じ時間内に実験・観察を取り入れた場合の学年別指導のあり方についても考える単元構成に挑戦しました。

5年「花から実へ」



本単元では，花のつくりや実のでき方を探っていきました。カボチャを使って受粉と実のでき方について調べました。

実験・観察を通して，おしべにある花粉がめしべの先につく（受粉）と，めしべのもとが実になり，実の中に種ができることを理解しました。

6年「生物とかんきょう」



本単元では，生物（動物や植物）と養分・水・空気などを関係づけながら調べました。見いだした問題を多面的に追究することによって，生物は周囲の環境とお互いにかかわって生きていることを子どもたちが，とらえられるようにしました。

同じ時間内に実験･観察をして

単元の中では同じ時間内に実験・観察を取り入れて授業を行いましたが，「予想」「実験・観察」「考察」の時間をずらすという方法で，教師の「わたり」の間合いを計り，同時に安全面にも気を配ることができました。しかし，慌ただしくなってしまったことは確かです。また，一方の「実験」にかかわっている間に他方の「考察」場面となり，重要なポイントを逃してしまったということもありました。やはり，教師が子どもたちの話し合いをじっくりと聴き，ポイントでかかわっていけるような展開をめざしていきたいです。これからも，よりよい学年別指導を研究していきます。

※県内外の複式学級の子どもたちや先生方との交流を深めるために，交流掲示板を立ち上げました。詳しくは本校ホームページをご覧ください。なお，掲示板にはID とパスワードが必要ですので，交流を希望される場合　は本校あてにメールにて通知してください。

複式学級の紹介



３・４年Ｆ組担任
市川　哲哉

はじめに　本校の複式学級は①和歌山県に複式学級が非常に多いこと，②教育実習校であること，③教育研究校であることを目的に設置されています。各学年男子４人，女子４人の８人，１学級１６人となっています。複式学級を有する附属小学校は近畿では本校のみです。複式教育といっても，附属小学校の場合，人為的に構成されたもので，児童数も各学年の男女比もバランスがとれ，子どもの実体を見ても都会的で，いわゆるへき地性を持ちません。したがって，県下の公立の複式学級とは異なる点も多いのですが，一人一人の子どもたちのよりよい教育を願って取り組んでいる点は同じです。

複式学級の特徴　まず，子どもたち自身で授業を進めることがあげられます。司会・記録をおいて，自分たちでどんどん授業を進めていきます。１・２年生からそうしているので，３・４年生とは思えないくらい上手に司会をします。司会・記録以外の子どもたちも話し合いを進めようという意識が高く，フォローアーシップが育っています。また自分の考えや思いを友だちに伝えようと，必死に表現しようとします。

異学年が同じ教室にいることで，上の子には責任感が生まれ，下の子の面倒を見てあげようとします。下の子に順番をゆずってあげるなど優しさも育ちます。下の子は上の子を見習うようになります。また上の子に認めてもらおうという意識がはたらき，がんばります。



本校の複式学級の取り組みとその様子　授業では現在，国語・算数・理科・社会は学年別の内容でおこなっています。異学年の交流を取り入れるために，できる範囲で教科書の単元を組み替えています。

しかし毎時間の準備に時間がかかるのも事実です。子どもたちは自分たちで進めていこうとするものの，教師の考えとは違う方向に進むこともあります。課題設定の難しさ，学年を行き来する「わたり」の難しさに悩む日々を送っています。「わたり」の工夫の一つとして，小さい発表ボードを利用して，子どもたちの考えや話し合いがどう進んでいるのか，すばやく把握するよう心がけています。

教科の授業のほかに，昨年度から「複式タイム」という時間を設定しています。１年生から６年生までの縦割り班活動です。「協力プロジェクト」と題して，昨年度は「詩や物語の朗読」，今年度は「劇作り」に取り組んでいます。縦割り班の活動をすることで，複式学級の一体感が得られること，高学年のリーダー性を育てること，表現力をつけることに一定の成果を上げています。

文部科学省委嘱
国語力向上モデル事業　研究発表会
平成２０年　２月　１５日　（金）
１３：１５～１４：００　公開授業　3クラス
１４：０５～１４：５０　研究授業　1クラス
１５：００～１７：００　研究協議
講師：岡山大学教育学部教授　　菅原稔先生

From Editors

トップページでご紹介しました研究発表会を１１月に開催します。ふるってご参加ください。詳しい情報は本校ＨＰをご覧ください。

和歌山大学教育学部附属小学校
〒640-8137　和歌山市吹上１丁目４番１号
TEL　（０７３）４２２－６１０５
FAX　（０７３）４３６－６４７０
URL　http://www.aes.wakayama-u.ac.jp
Mail　fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp